

# か くら い さ ざ ん 加倉井砂山

にっしんじゅくしゅ  
日新塾主として多くの人材を育てた教育者 水戸市



(妙徳寺蔵)

文化2年(1805) - 安政2年(1855)。東茨城郡成沢村〔水戸市〕の庄屋・加倉井久泰の二男として生まれる。兄の死去にともない16歳で家督を継ぐ。はじめ、父のもとに通学する子弟に対し、父の補佐役として教育に当たっていたが、20歳のときから塾をまかされる。門人の増加につれて塾舎の増築と寄宿舎の新築を行い、それらの建物は総称して日新塾と呼ばれた。教育科目は学芸、武芸、医学、時事問題など幅広く、30年余の教育活動の間には少なくとも1,000人を超す入門者があった。私塾としては県内最大ともいえる「日新塾の跡地」は、平成27年(2015)4月、日本遺産に認定された。

砂山は、文化2年(1805)、水戸の城下町を出て北西へ一里半(約6キロ)ほどのところにある成沢村〔水戸市〕に、加倉井久泰の二男として生まれました。名前ははじめ久雍、のち雍と改めます。砂山は号で、のちに学者・教育者となった時の名です。

加倉井家は、代々成沢村の庄屋<村長>を務める家で、砂山の祖父の代からは郷土<農村>に住みながら、武士と同じ身分を与えられた者>に取り立てられていました。

少年時代の砂山は、江戸へ出て勉強しようと考えていたものの、兄が死去し、父の説得もあって、家を継ぐことになりました。16歳のときです。はじめは父が開いていた私塾の子弟に、その補佐役として教育に当たっていましたが、文政7年(1824)、20歳からは父に代って塾の責任者になります。

やがて教育者としての砂山の評判は、水戸藩主の徳川齊昭(P.43参照)の耳にも届くようになりました。天保14年(1843)、水戸城外の常葉村〔水戸市〕に完成して間もない偕楽園の好文亭に38歳の砂山も招待されます。

それは、好文亭の新築を機に、30数名の招待者に偕楽園の景色を見ながら思う存分詩を作らせよう、という齊昭の考えによるものでした。その詩一つひとつに目を通した齊昭は「砂山の詩がもっとも優れていると思うがどうか。」と、そばに控えていた者たちに尋ねました。すると皆が「お殿様と同じ意見です。」と答えたといいます。

砂山の名声が高まり、藩内にとどまらずその周辺にも広まっていくと、門人はさらに増え、自宅の周囲に塾舎の新築や遠方からの門人のために寄宿舎も必要になりました。塾舎の一つに「日新舎」があったので、塾舎の全体が、いつしか「日新塾」と呼ばれるようになります。「日新」とは中国の古典にある言葉で、「人は学徳を修め



日新塾跡出土オランダ陶器  
(水戸市教育委員会提供)

て一日一日新しくならなければならない。」という意味、日々の努力が大切なことを教えた言葉です。

塾生の数はその時々で変わりますが、最も多い時には102名も学んでいました。藤田東湖（P.67 参照）の四男・小四郎や、川崎八右衛門（P.23 参照）なども日新塾の入門者でした。安政2年（1855）、砂山は51歳で亡くなりますが、30年余りの教育活動の間には少なくとも千人を超す人々が塾で学びました。

砂山は「個性を尊重し伸ばす教育をしよう。」「時代の進展に応じた教育をしよう。」という思いから、さまざまな分野にわたった教育を行いました。学芸では、習字、読書、作詩、作文にはじまり、地理、歴史、数学、兵学のほか、日常生活や時事問題などが話題となることもありました。武芸では、剣術、馬術、軍事訓練などがあり、砂山は医学にも関心が深く、書庫にはたくさんの医学書もあって医者への勉強に役立てていました。このようにして、社会に役立つ人材を育てようとしたのです。

門人の一人で初代の塾長になった興野介九郎は、晩年の砂山について次のように記しています。「先生は、中国の古典を学び、歌を詠み、すでに深い学問を修めておられるのに、50歳になってなお、これからはオランダの学問も身につけなければと、暇を見つけてはオランダ文字を写しながら勉強されていた。」

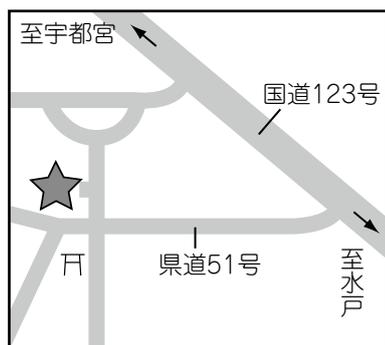
時代の進歩に遅れまいと日々努力を重ねた砂山自身の姿をよく伝えていきます。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 日新塾跡

所在地 水戸市成沢町 337 - 7 外

内容 日新塾の建物は明治10年に火災に遭い多くが消失し、その跡地には全体の見取り図や案内板等が設置されています。



### おもな 参考文献

『水戸市史 中巻 (三)』（水戸市史編さん委員会・1976）

『江戸時代人づくり風土記 8 <茨城>』（農山漁村文化協会・1989）